

武家の躰 子どもの礼儀作法

小笠原敬承斎(光文社新書 2016.9)

著者は、自分本位の人が増えていること、思いやりになされた人の行動が目立つことなど日本人の礼儀が失われてきていることを憂えています。日本人が本来もっているはずの他者を慮るころと、物質的ではなく精神的な豊かさが感じられる世の中を取り戻してほしいと願っています。

◆親のなすべきこと

武士は自分の子どもに対して、**愛情を大切に**しながら接していた。常に子どもへこころを傾ける。すると、たとえ小さなことであっても、子どもの感情の変化に気づくことができる。それが親のなすべきことではないか。

◆子どもに考えさせる

子どもが考える前に、こうしなさいと**答えを出してはならない**。たとえ時間がかかったとしても、子どもが出す答えを待つことも親の役目だ。待つ子とは試練を要する。面倒に感じることもすらある。しかし、それこそが子どもの責任間を育てる。

◆親子の人間関係

子どもだけに基本的信頼感を育てようとするのは無理。**特に重要なのは親子関係**。そして次にその子が関わるころの様々な人間関係。

◆「こころ」を

ものが豊かな時代、ものの値段や量で、相手の心を押し量ってしまうことがあるかもしれないが、ものの背景にある「こころ」を感じる気持ちを、幼い頃から養ってあげることも躰の一つである。子どもの誕生日やクリスマスのプレゼントをきっかけに、「**こころの贈り物とは何か**」ということ、ぜひお子様に伝えていただきたい。